第一章　第３節　「大峰奥駈道」スルーハイク
～［神変大菩薩(役行者小角)と同行二人］～

標記街道を正身 2010（平成 22）年９月 24 日（金）奈良県吉野川スタート～９月 29 日（水）熊野本宮大社ゴールまでを５連泊６日間で逆峰、ルート沿い計画距離 101 ㎞に対する実歩行距離 120 ㎞を連続連日歩行で踏破しました。１日平均の実歩行距離は 19.9ｋｍ、同時間は 8.3 時間、同平均時速は 2.4km となりました。もちろん、この期間中に休息日は入っていません。全ルートの概要は図―５のとおりで、足跡を残した通過県は奈良県と和歌山県でした。この時は、吉野から本宮に向かう逆峯行でした。前々日から前日までの二日間は平城京奈良遷都 1300 年祭に係る奈良の寺社を視察・学習し、近鉄吉野線下市口駅前の旅館に泊まり、翌日のスタートに備えました。このルートの道そのものがユネスコ世界遺産に登録された「紀伊山地の霊場と参詣道」の中の一つです。専用の縮尺５万分の１登山用地図が販売されているので、前記ガーミン社同オレゴン機は携行しませんでした。

図－５

１.「大香ブランド老魂サブタイトル」設定の背景事情

元々、「スルーハイク」は人生修行道場と思っていますから、この年の春、地元（住まい）の周りの人にそれとなく思いを打ち明けているうちに、ある人から「山岳抖藪の実践行となれば『役行者』だ！」と言われたのです。実は初めて知りました。この山岳修験道の開祖と云われる役行者小角への関心が高まって、書籍を求めるなど色々と調べるようになりました。この地大峯奥駈道が日本古来の山岳信仰に神道、外来の仏教・道教、陰陽道等が混淆した吾が国独自の山岳宗教を育んで来た聖地である事も初めて知りました。また、弘法大師・空海が中国・唐から帰国後、高野山を開く前に大峰山で修行したとも云われています。

そうなれば、修験者の最も重要かつ過酷な修行の場となった「大峯奥駈道」を歩行しなければならないとの義務感みたいなものがふつふつと湧き上って来ました。1300 年以上の長きに渡って、数多くの山伏・修験者によって踏み固められて来たこの道・秘所に踏み入れたいと強く思念するようになったのです。計画の６日間は食料を持参しなければならないの

で少し不安もあったが、神変大菩薩役行者の響導（先に立って案内すること・人）を賜りながら二人で踏破したいと念じました。そこで「大香ブランド老魂サブタイトル」を見出しの［神変大菩薩(役行者小角)と同行二人］に設定し、一念発起して踏破しました。

２．山上主脈ルートの状況

（１）厳しい起伏

９月 24 日（金）の６時 40 分、「７５靡　吉野川柳の渡し(六田の宿)」をスタートしました。主脈上に上がってから、所々に岩場が現れ、ロープ・梯子個所が頻繁に現れました。最高峰は 1,915ｍの八経ケ岳で、全体を通じてそんなに高い山は無いが、歩き道の起伏・アップダウンは激しいものがありました。それだけ緊張の連続を強いられる所で、油断大敵、まさに修行道場に相応しくぴったりの行場でありました。　中でも 25 日から 28 日の４日間は、峰々山上主脈ルートでは携帯電話（この時は「ＡＵ」）が不通の場所で、さらには下界に集落の存在を見る事が出来ませんでした。紀伊半島脊梁から見える深い谷と渓谷、山並みが幾重にも重なる風景は、深山幽谷と言えば格好は良いが、それだけ、奥深い地域でした。四方万緑の限りであり、その上に午前中は毎日が濃い霧が渦巻いていました。正直な処、夜などは不安を感じました。途中で体調を崩しても、簡単に連絡は取れないし、下界にはおいそれと降りられないのです。つまり、集落まで１時間以内で行ける「エスケープルート」が無いのです。人里まで下りで３時間前後です。ピークを目指している登山者（ピークハンター）とは会いましたが、主脈を一気通貫する目標を持って私を追い越し、あるいは私と交錯した大峰奥駈道スルーハイカー（人）は誰もおりませんでした。このような山中故に、踏破可能ならしめたのは、まさに神変大菩薩役行者の響導、誘導支援の賜物と素直に、大いに感謝しました。

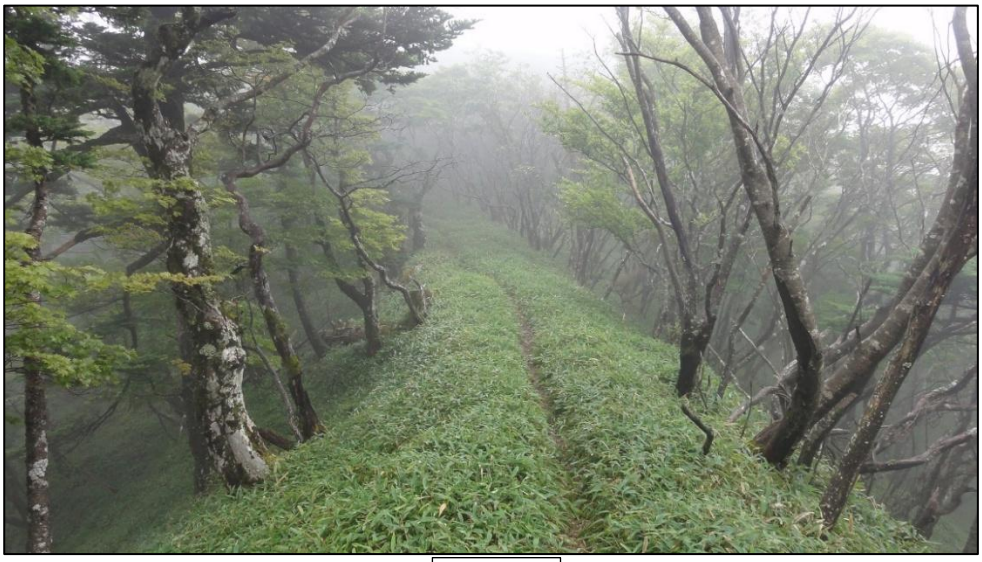
１日目の夜は二蔵宿の山小屋に泊、２日目の夜は行者還の山小屋に泊、３日目の夜は深仙宿の山小屋に泊、４日目は行仙宿の小屋に泊、ここは、小屋には鍵が掛かって入れなかったが、幸いにも隣接する行者堂（お堂）があり、空いていたのでその一畳ほどの土間に寝ました。５日目の夜は、一日の歩行距離からしても玉置山の玉置神社に宿泊する予定であったが、途中の小屋に「１週間前の予約なしは受け付けない」と言う張り紙があった事――電話したかったが、エリア外にて不通――から、時間帯は早かったが、主脈から一旦離れて、40 分ほど下った上葛川の民宿「浦島」に泊まりました。テント持参だったので、民宿に泊まらず、主脈上にテント設営でも良かったが、体力の消耗感が激しく、精神的にも萎えて来て気力減退感があった事から民宿に入りました。いずれの日も泊りは私一人だけでした。この気持ちが萎えた最大の理由は、主脈上には水場は無いに等しく、充分に補給出来なかったからです。

最終日の６日目９月 29 日（水）は一番長い 31 ㎞を実歩行したが、天候が曇りであったものの雨は降らずに快調に進む事が出来ました。ついに 14 時 40 分熊野本宮大社に到着しました。

北アルプスのような高度感はないが、道の凹凸起伏が激しく、山の雰囲気の影響からなのか心身の調子の浮き沈みも大きくなって、強い覚悟がないと一気通貫踏破は困難を伴う場所である事を実感しました。北アルプス登山よりも寂しさを感じる時が襲い、心理的負担はこちらの方が格段に大きく感じました。

図―６は、山上ケ岳を過ぎた所の奥駈古道です。このように頭上が開かれた所もあれば、温暖地域特有のこぶがあってくねくねし、木肌は茶色の樹木が道の両側から頭上に覆い被さって回廊になっている所もありました。若木なのに老木・老樹の風情がありました。「若朽（若いのに気力に欠け、役に立たないこと。また、その人)」の言葉が浮かんで来ました。若朽は痛烈な侮辱の言葉です。

なお、私は６日間で歩き通したが、普通は山登りの上級者でも７日間～８日間と云われていますから、かなりの強行軍でした。



図－６

（２）点在する山小屋は無人

主脈上の山上ケ岳（大峰山）は、大峯奥駈道の中では最大の修行霊場・行場になっており、ここにある大峯山寺本堂の建物は日本で最高所に立つ国の重要文化財です。この霊場としての奥駈道は、５月３日に開かれ、９月 23 日に閉ざされる事になっています。この戸開（とびらき）・戸閉（とじめ）の期間は、山上ケ岳に点在する参籠所（宿坊）や弥山小屋が営業します。この期間を外れた私の歩行中は、宿泊は不可能としても食べ物を置いているのではないかと言う淡い期待を込めて行ったのですが、残念ながら主脈上では調達する事は出来ませんでした。ただ、弥山の山小屋だけには番人がいたので、ポカリスエットを買いそこで飲料しました。主脈上に避難小屋は適当に配置されているが、通常無人なので上記期間外は、食料品は何も無い事を覚悟しなければならないのです。

水は、容器に入れて背負う方式の自由吸引（ハイドレーション）システムのものを初めて採用しました。スタート時の荷物の重さは、５日半間分の食料と２リッターの水を入れて 16 kgほど――私にとっては経験上最大の重量――でありました。主食はラーメンにしました。携帯用 LPG ガスについては、飛行機には持ち込めないので、宅急便で麓の旅館（大正館）に予め送付しました。軽量化を優先したがために、ラーメン以外の食糧は必要量の３分の１程度しか持参しなかった事からカローリ不足になっていたものと推測はされます。この主脈上には水場は少なく、あったとしても「ちょろちょろ」だったり、道からは、急斜面を相当下らなければなりませんでした。最悪時、途中でのビバークも考慮し、そのためにテント（フライ・ポール付）も持参したが、結局は一度も使わないでしまいました。

（３）山奥に散在する修行霊地

大峰奥駈修験道には、ほぼ中間の孔雀岳と釈迦ケ岳の間に「曼荼羅金胎両部分け」と名付けられた個所があって、そこより北の吉野側を金剛界、南の熊野側を胎蔵界と云われる所であります。その「金胎両部分け」とはどんな所なのか、深い神秘性を感じる場所ではないのかと興味がありました。しかし、現地は、ただの大きい岩の割れ目でありました。そこを通過するのであるが、あいにくの小雨の中であり、神秘性・神威を感じない儘、ただ鎖に摑（つか）まって、無我夢中で過ぎてしまった感じでした。

両部分け地点から南下、つまり胎蔵界領域に入って行くと、樹木・植生は亜熱帯性を帯びており、太陽光が少ない曇りの中では、幻想的・幽玄さを感じる雰囲気となっていました。亜熱帯性の樹木は、杉・松のように背丈は伸びないが、幹が曲りくねり、太いものが密生しつつあちらこちらに固まって生育しております。それが何とも言えない原始的な趣むきを醸し出していました。

さて、奥駈道全域には一番から 75 番までの「大峯７５靡（なびき）」と言う神仏が祀られている拝所・霊地・宿（しゅく）が点在しており、この主脈上には 70 個所近くあります。そこには碑伝（ひで）（納め札・木札、修験者が修行

として、ここに詣出(もうで)た事を神仏に証立てる印＝名刺のようもの）が収められていて、十分に霊妙さを感じさせる、秘境感を満喫させる場所でありました。図―６上は、「椽(えん)の鼻(はな)」と呼ばれる拝所で、この奥駈道峰中で第一の絶景スポットと云われています。テラス状の岩盤上からは、下界は広角度の展望が開けていました。同図の左下（大岩の地際）に見える木札が碑伝です。図―７下は、「第３８深山宿(じんぜんのしゅくなび)　靡(なびき)き」です。中央（右側）の建物は灌頂堂で、左端の建物は、私が泊まった数人しか横になれない山小屋です。この奥駈道の最深部と言われる場所で、とても寂しさを感じる所でした。土地的には解放感があるものの、薄気味悪い雰囲気をも感じました。逆に言えば、それだけ霊妙さ濃い修行の場でありました。この周辺で怪我でもすると、電話連絡は不可なので命に係わる事になります。この「深山宿」は役行者がその波乱に満ちた人生の中で、最後の行を修めた聖地で、ここから中国は唐に渡ったと伝えられています。

図－７

　さて、思い（空想）です。この主脈上の靡(なびき)の全てにおいて神変大菩薩役行者から修行に励む時の勤行の儀式を催行して貰いました。全山に木霊(こだま)し、全山に吸い込まれて行く声に誘われ、大日如来を初め、十方三世の諸尊聖衆(しょうしゅう)、大小神祇(じんぎ)が役行者の処に参集して来る雰囲気を感じました。至高の霊妙さを感じました。そのような奥駈道だけに、熊野本宮大社に到着し、無事を報告しつつ参拝した時は、安全抖擻(とそう)を見守り後押しをしてくれた神変大菩薩役行者小角のお蔭と感無量になりました。

３．ハプニング

（１）３日目の９月 26 日（日）晴れの日、楊子の小屋の所で、おしっこをした時に薄黒い濁った尿が出てびっくりしました。濃い黄色を通り越して黒色でした。血も混じっていたのか？主脈上には殆ど水場なく、あるにしても谷底に相当下らなければ確保出来ないのです。そこで、背負っているハイドレーションからの水分補給を抑制しながら歩く事になり、水分吸収不足となって内蔵の働きに異変を来たしていたのだと思いました。しかし、それでも体調不良を実感する事はなく不思議な思い（歩きたいという気力・精神力が内臓の異変に勝っていた？　異変を薄めていた？）がありました。そこで水汲みに川筋を５００ｍほど下った（下り 20 分、上り 50 分）のですが、とても遠く感じました。

（２）４日目の９月 27 日（月）泊まる予定の行仙宿（ぎょうせんせんしゅく）の小屋に 14 時 30 分に着きました。その頃から雨が降り始め本降りへ変わって来ました。小屋には鍵が掛って入れなかったのです。四方を色々探して見たが、どうしても開けられません。テントを持参していたが、強い雨になって来た事から、目前に建物がある事からして、どうしてもテントを張る意欲が湧きませんでした。幸いにも隣の行者堂（図－８）の扉は開閉出来ました。ただ、そこには、不動明王などの仏像が安置されており、横になれる所は入り口の畳１枚分の土間のみでした。結果的にはそこにあったブルーシートとテントのシートを敷いて寝ました。しかし、冷え込みも加わって一睡も出来ませんでした。

図－８

水場へは垂直に近い急勾配の、下り 15 分、登り 40 分程の所で、雨の中での水汲みとなり非常に遠くに感じ、山小屋が使えない事のショックで、すっかり心身とも消耗してしまいました。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ところで、飲料水のことです。主脈上には有益な水場がないために、各避難小屋にはポリタンクなどに入れた水が確保され、黒板にはここに持ち込んだ月日が記述されていました。しかし、信用出来ないこと、何か毒でも混入されていないとも限らないことから、私は一滴もお世話にはならなかった。

４．人の情け

その１：５日目の９月 28 日（火）主脈から下った上葛川の民宿「浦島」に飛び込みで泊まった時です。高齢のご夫婦が営んでおり、ご主人は数年前に脳梗塞？を煩ったらしく言葉と足が少し不自由でありました。眼光が鋭く、私の全身を上から下まで眺めて「お前なら歩き通せるな！」とおっしゃられた言葉が印象に残っています。山を歩く時には、辛みの利いたイカ（スルメ）が大変良いとの事で、その後のスルーハイクでは予備食としてピーナッツとスルメを混ぜたものを持参しており、なるほどとても良いエネルゲンになります。

その２：６日目の９月 29 日（水）14 時 40 分熊野本宮大社に到着し参拝の後、宿を探しました。本宮目前の民宿・喫茶店の「Ｂ＆Ｂ　ｃａｆｅ　ほんぐう」に泊まりました。若いマスターで、自身が山伏修験道の現役行者と話されました。靡（なび）きの場所で「般若心経と祓詞」を唱えて来た事を話したら「そのような気持ちを持っている人だから歩き通せる。この大峰奥駆道は生半可な登山気分では絶対歩き通せない。」と話されました。また、酒は自分の所では扱っていないので、自由に酒屋から買って来てここで飲んで良い、空き缶は部屋に置いて良いと言われて、酒屋を丁寧に教えてくれました。明日は高野山に行く事を話したら「無量光院」と言う宿坊を紹介してくれました。（結果的にここに泊まった。）

「他（ほか）」を紹介する時の言いぶりがとても親切で好感を持ちました、とかく観光地の商売人にありそうな自分だけが儲ければ良い、自分は一円も損しないと言うような姿勢は微塵もありませんでした。実践している修験者は違うなあと感激してしまいました。とかく、従来型観光地の老舗旅館は、一つの建物の中に、あらゆる遊興施設を整え一人占めの営業をやって来たが、九州の湯布院は、一つ一つの宿・お店が専門性を発揮して、有機的な連携を図り全体としての価値を高めていくという戦略ですが、そこに似たような取り組みを感じました。政治家諸氏の個利個略・我利我欲のやり方とは真逆です。

５．新たな思い

ハプニングもありましたが、人の情けにもお世話になりました。この道は、役行者小角から連綿と続き、今も山伏姿をした修験者が行の為に分け入り、生きた修行を実践しております。今回は「逆峯（ぎゃくふ）」のトレイルであったが、「順峯（じゅんぷ）」と言って、今回ゴール地点の熊野側から入山し、吉野側に歩いて見たいと言う希望もあります。いつかは実現したいと遠い先を夢見ています。しかし、加齢は進み無理かも！　この道を若い時に知っていれば、「順峯」も挑戦出来たと思う、悔しさが残る。

６．本トレイルの感想をつたない短歌に

“大峯奥駆道（おくがけ）は山奥深く霧が巻く　役小角（おづぬ）が守り迷わず完（かん）（貫）歩（ぽ）”
“寂しさが押し寄せ来たる奥駈け路　たまに役小角の気合いが掛かる”
“大峯奥駆道（おくがけじ）電波届かぬ秘境の地　魔性が現れ意地が試され“
“大峯奥駆道（おくがけ）の出入りの口を取り仕切る　蔵王権現熊野権現”
“今の世（せ）も山伏姿で闊歩する　役行者道（おづぬ）でも悩みは切れぬ“

（end）

③２０１０(平成22)年「大峰奥駈道」スルーハイク（５連泊６日間） の 全踏破歩行記録 ----- 移動行程集計表

＜　ＧＰＳ「オレゴン機」は不携帯に付き、後日歩行ルートをトレースして、「カシミール３Ｄ(フリーソフト)」により集計　＞

「大香ブランド老魂サブタイトル」は　　～　神変大菩薩(役行者・えんのぎょうじゃ＝小角・おずぬ)と同行二人　～

	行動月日		街道の歩行区間	実歩行	歩行時間				平均時速	天候	備考	宿泊先（略称）	
累積	月	曜	通過主要地点・旧宿場名・始終点	距離	歩行開始	歩行終了	歩行時間	時間換算					
日数	日	日		km	時:分	時:分	時間:分	時間	km/h			所在地	名称
				a	b	c	d=c-b	e	f=a/e				
前日	9月23日	(木)									(前日泊)→	奈良県大淀町	旅館　大正館
												スタート	
1日目	9月24日	(金)	[75靡「柳の渡し(六田の宿)」(S)]→金峯山寺→二蔵宿山小屋	18.5	6:45	14:30	7:45	7.8	2.4	曇り		大峰山脈主脈上	二蔵宿山小屋（自炊）
2日目	9月25日	(土)	（前終点）→山上ケ岳→大普賢岳→行者還山小屋	20.4	6:45	16:45	10:00	10.0	2.0	曇り	携帯通信不可	大峰山脈主脈上	行者還山小屋（自炊）
3日目	9月26日	(日)	（前終点）→八経ケ岳→釈迦ケ岳→深仙宿山小屋	15.5	7:45	16:25	8:40	8.7	1.8	晴れ	携帯通信不可	大峰山脈主脈上	深仙宿山小屋（自炊）
4日目	9月27日	(月)	（前終点）→涅槃岳→平治ノ宿→行仙宿山小屋	23.0	6:30	14:30	8:00	8.0	2.9	曇り	携帯通信不可	大峰山脈主脈上	行仙宿山小屋（自炊）
5日目	9月28日	(火)	（前終点）→地蔵岳→上葛川への分岐	11.2	8:00	13:50	5:50	5.8	1.9	曇り	携帯通信不可	奈良県十津川村	民宿「浦島」
6日目	9月29日	(水)	（前終点）→玉置神社→大黒天神岳→[熊野本宮大社(G)]	31.0	5:00	14:40	9:40	9.7	3.2	晴れ		ゴール	
											（最終日泊）→	和歌山県本宮町	民宿「Ｂ＆Ｂほんぐう」
			合計	120						101	←ルート沿い計画距離		
			１日平均	19.9				8.3	2.4	16.8			
				km				時間	km/h	km			

（注１）この霊場としての奥駈道は、戸開の５月３日から戸閉の９月23日までは、山上ケ岳に点在する参籠所（宿坊）や山小屋の一部では軽い食料は調達可であるが、その期間外は不可（私はこの間歩行）。

（注２）ルート沿い計画距離に対して実歩行距離が、19㎞（１日当り3.2㎞程）長くなった理由は、山道の登降（沿面距離）等のジクザク歩き方の影響による。

（注３）距離と時間の集計は、旧街道・古道沿い関係のみであり、長時間（片道15分・500m程度超過）街道を離れた場合などの移動ロスは除いて補正している。